

(1ページから続く)

「近所の頼れるおっさん」として地域のコミュニティの中心になりたいと考えた石丸さん。地域住民の会話が交わされる喫茶店の店主になることを目指した。「喫茶店の井戸端会議で愚痴をこぼせば話を聞いてくれて、時には他の人につないで結果的に良い方向に持っていく存在になりたかった」という。

薬剤師になった後も喫茶店でコーヒーを淹れる夢を追い、調剤薬局と喫茶店を併設した「調剤喫茶」の構想を練った。しかし、飲食のプロではなくコーヒーに詳しくもなかったため、すぐに喫茶店を立ち上げるのは難しいと判断。ランニングコストが小さくても事業を始められる方法を模索し、屋台を出店するアイデアに至った。

同様の事業が既に兵庫県豊岡市で始められており、インターネット上で必要な資金を募るクラウドファンディングで元手を集めたと知り、石丸さんも21年9月から約1カ月間にわたって募集を行った。

目標額を10万円に設定していたが、開始から3

時間ほどで目標を達成し、結果的に約70万円が集まった。そのため、クラウドファンディング実施中から準備を進めることができ、屋台の完成にこぎ着けた。募集時のコメント欄には、「ぜひ実現してほしい」「いつも応援している」といった激励のメッセージが寄せられ、「調剤喫茶をやりたいという夢を周囲に語ってきて、この夢を発信してきた価値があると実感した」と自信を得た。

事業スタートから約1年が経過した。石丸さんは「薬局や病院では聞けないリアルな声を拾える。今までは患者がいかにも本音で話してくれていなかったかが刺さるように分かった」と率直に語る。患者は治療効果に不満を持っていても薬局等では「いつも通りだよ」と答える人が少なくないが、屋台での会話を通じて不満や不安が鮮明に見え、今までの見方が覆ったという。



石丸さんから声をかけて雑談が始まる

## 在宅で柔軟性ある医療学ぶ 地域の人々の日常を支えたい

石丸さんは東邦大学薬学部を16年に卒業。卒業時点で調剤喫茶を立ち上げる計画だったが、現在の医療システムや病院の内情を理解する必要があると考え、病院薬剤師として就職した。薬剤師として必要な知識、多職種連携など求められるスキルを3年間かけて学んだ。病棟責任者も経験し、「患者がどのような医療を受けて退院していくか、一連の流れに携わっているスタッフの思考や動きが分かるようになり、チーム医療の考えを学んだ。座学では想像するしかなかった世界を肉眼で見られたのが良かった」という。

その後、独立を見据え、病院から施設調剤を中心に扱う調剤薬局に転職した。患者と会話する機会の少なさを実感し、門前薬局にも異動した。門前薬局では、コミュニケーション面で患者との壁を感じ、調剤喫茶立ち上げへの思いを強くした。この時点で立ち上げる考えだったが、石丸さんが現在勤務する「まんまる薬局」の社長と出会い、在宅医療の現場を知ることの重要性を説かれ、在宅医療に特化した薬剤師として活動を始めた。



薬局の店頭に設置された屋台一式

在宅医療を通じて、ガイドラインなど「正しい医療」と言われるものが必ずしもベストではないことを実感。患者の生活にどれだけベストを落とし込めるかという思考が生まれた。「在宅医療に関わる総合診療医からは柔軟性のある医療の形を見て学ぶことが多い。通常は1日3回服用する薬を朝晩だけ服用するなど、白黒ではなくグラデーションで考えられるようになった」という。

反面、生活環境が患者ごとに異なるため、正解がないことが難しい点とも語る。そのため、薬以外の話をする機会が増えたほか、自分のスマ

ートフォンに花の画像や演歌を入れるなど、患者の興味や関心への理解を深めるよう心がけている。

薬剤師として様々な現場に関わってきた。薬学生に向け、「新卒で就職後に燃え尽き症候群に

なる人を沢山見てきた。薬剤師になること自体を夢にしないでほしい。資格や知識を用いてどんな人になりたいか、どうありたいかをイメージしてキャリアを形成してほしい」と語る。

2年後をメドに勤務先から独立し、薬局を併設した喫茶店を開業する構想を練っている石丸さん。「地域の人々の日常を支えることがやりたいことの根幹。常設の店舗で腰を据え、お客様にゆっくりとしてもらえる空間で、点ではなく面で支えたい」と話す。屋台の冬期休業期間中に常設店舗の開店に向けたアイデアを蓄え、クラウドファンディングの実施も検討したいという。



お茶の葉の販売も行っている

薬学生のための求人情報サイト

プレOPEN中!  
先行登録受付

# ファーネット 2023&2024



# 病院求人件数

ナンバーワン!

全国の病院・薬局を300件以上掲載!

<https://www.pha-net.jp/>

ファーネット

検索

今すぐ  
登録!